墨田川梅柳新書

三

へ13
1300
3

1300
3

墨田川梅柳新書巻之三〇

本清

東都 曲亭主人著

六 盛景影江ふ亂時を殺を

仁科平九郎盛景が家子摠太八十二のとしふ喜瀬川を逐電ちくとう。武藏國江戸の住わとう。忍が岡すぐ迷ひ来ふ酒屋何がしといふの情ある男ふくそのよるべなきを憐ミ家ふとめて小厮となし両三年養ひおくとうあ元来ムごゑのうかゝ紙べ忍地再生の恩を忘却し主人の銭居妻盗とうく逃さるのねちうふ摠太八成長ふ及びて身長六尺ふあまり。膂力人ふ勝れ武術習さるふ相撲柔術成よくし且彦袁道が伎ふ人圍ゝ只顧不義の財を貪彼此を徘徊しつゝ悪き友とのゝ昵ひ相語よろづおのが隨ふ挙動へぶるそのゝ徒も彼が右へ出るものなくこゝ忍の夫とぞ稱けれこゝ忍の岡ふく

成長するにしたがひ惣太は東海道を竊行姝き女子に拐掣しくこれを遠き湊へ售賣せんとす。その身價小くのゆゑあるべきを淫酒の爲に道捨てり。又入間の平太麻羽原哲といふ二人の支黨あり。彼おのれ行僧に打扮して惣太に隨ひ、ひそかに悪行をなすことしばしば。その生没武藏野の邊に

より定まるべきなれば鎌倉より追捕せらるべきなり。平太原哲は亀鞠親子が薩陀山の麓に宿りし夜惣太が親族なるものを誘ひ出でて途よりつけ来りてその家に歇り夜深く亀鞠を劫し行李をも奪ひ去りぬ。山ふかく逃れ登りしに忽地亀鞠が俳優に謀られて二人奔走海面へ輾落ぬ。惣太も亦木立に月の影さへ暗くて父平九郎しきりに呼もとめど。ちからなく挑戰して岨を踏外して前に滾墮する平太が上に落かさなりし程に肋も身を傷ふべきの外汝

も手ぶくに僅に膝の節を浸すばかりなれば。やがて身を起して見るに平の落るとて。嵒石に頭を打碎きて脳みそ出て死しぬ。原哲は手足を少し打傷なるのみにて巖の間に挾まりて蠢き居る。惣太は呼びけるに原哲は惣太が扶起されて跛出るを見て。平太の負ひつて落ぬれば行李を探當かねる趣あり。こいつふたりをばいかにせんといふに惣太は一しきり探りて是を徒に流しやれば。あるべきかれりくいんとくづくづ取て楚と脊負ひ二人ともに遥に西の濱方より上り。好くこそ舊の山路に登りてこれば旅人も美女しいづ地行く人影もなくめぐ。剰地藏堂に置て道に笈を入れ。なくなりぬれど命拾ひしを天の車はしく山を東へ走らぐり。夜あけて件の行李をとりあけて中なる牌を著て仁科平九郎と書字しるしあれば大に驚きさてはこの夜

愿哲ホガ奪ひ取りし少女いづが妹亀鞠ふく。挑み戦ひしに父ありうとまを
ゆるゆるさとがみ法ず〳〵。縁由を密語バ愿哲へ〳〵ふく〳〵慙愧せり元此
惣太ハ梟悪無雙の奸賊なれバ親兄弟のうを敢ひ遣ふもあ〳〵祇ど。
又おぼつかなし所もあ丶バ去のび〳〵喜瀬川ホ到ぬ。夕ゐぐ〳〵愿哲ホ父のう
を伴さるホ。平九郎ハ如此〳〵の故ありて。いねる日亀鞠を將て旅ぐちぬとい
さてゐ於〳〵惣太が疑念ぞ〳〵解〳〵からぬ〳〵ところ美ひ。これ駿の人
と組〳〵一度も後ゆ。ひりし事ゆ。ふいひ〳〵ひゐ〳〵も薩陀山より滾〳〵
落されそ〳〵ぬを。父と挑み戦へバなれぞ〳〵千引の石ハ動ぞとも。親ゐを贏
ぬなりのかなと呟くゐぞ。愿哲をうち笑ひ。ゆぐ〳〵足柄越〳〵相模
路ホ起さけを。さても平九郎盛景をかれぞ〳〵ふらひもかけぞ。薩陀
嶺ゐ〳〵路銀行嚢ゆ失ひ。加賀千尋の底へ滾〳〵落せ〳〵荒男を。

つが子惣太くと猜〳〵ぬ〳〵滾更ホ楽まぞ。彼が象見なれ笑を用く回
國の行者ホ打扮亀鞠をばつゞ折・姿ホうひ繕ハせ〳〵親子先方後方
ふ〳〵ぬ。貧ハ人の門ホ立在く。一椀の飯をを。夜を月漏る樹蔭ホ臥く千
種の床ホ露を拂ひとかく〳〵三河國矢矧の郷ゆ〳〵来まる折〳〵を。
鎌倉武士とおぼ〳〵さゞ。黠の従者を將て追ひ来〳〵ハ。矢庭ホ平九郎
を取〳〵おさえ生〳〵縛されバ平九郎大ホ驚きぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ
干〳〵過ゆ。人違ふ去ひそといハせもあ〳〵ぞ。彼武士声とうう立。汝
既ホ天の羅ホ係りゐゞ。ゐほあ〳〵ぶひ脱まんとそれ欲。近曽忍の恐大〳〵
ひ癖者。東海道を偏歴〳〵。その外ハ笠を戴き笈を脊ふ〳〵回國の行
者ホ打扮。又二人の支黨を行僧ホ打扮せ。ゆ〳〵ふ人の女児を拐掣〳〵
非道の行をうのとる。既ま鎌倉ホ入。熟權義時朝臣の命ふ〳〵ふ〳〵

手丸て盛景
八物尺へ見
の笠くりて
同國の行者
おむかい亀鶴
を待く給へ
上る途中矢
刻の東松原
て伊庭十郎亂時
これと越太くと云
あやまりて
捕る

西ゆき
三界萬靈塔

普く探索ることなふ。今汝が模樣をこれが年數こそすとし長くれ惣太ごの骨相書ふこれ一般かくいふい鎌倉殿恩顧の侍。伊庭十郎亂時ふいかゐ眼い違ハじ。とく首伏しく後の笞ゑ脫ヨふといきまたあくく責問ハ平九郎ふくび驚た。忍の惣太といふハ。ごが子摠太ごゆるべし。ちくいはじめ亀鞠を奪ひ去し両賊も。彼が支黨ふくありけることそ。緣故さく告うまく。ままくく呆まくくれのこ。且くしくいくくそれがしそばる怪たものふあくど。年來駿河なる喜瀨川ゑ住居いさせしゑ。打ちたくゑの幸ゑく。妻を喪ひ子を先ぶて。世を捨つ世ゑ捨くれ。諸國の奚場を巡拜せんとく近曾故郷を生くれ。えとり腰ゑ一錢と携ひどゑ又ゑ刀劍ゑを帶ぞ。これゑくその人ゑあくるとを察しくゑくといふ。亂時はく冷笑ひ。汝言語を巧ゑくく陳ごれ。誰ゑこれを實言とべた。所詮論ハせく益

あり。とく笈を展檢よと下知されハくゑりぬと應しつ。笈の扉と押ゑくけば裡ゑ木像の阿弥陀一軀を安置せしのを見とゑふ物もなし亂時えくくその木像ことあゆくれ引出せと焦燥ぶ。一人こゑ流をしくく。掻とり棒くくりくゑくを亂時とえかうえ於ふ。木佛の背ゑ孔をあけく金三十両あまりを匿しもゑね。さゑ疑ぶくもおいね惣太ゑりゑ於證據ありゑ。ゑは偽ゑゆる憎さよと罵く。亂時腰なる鉄扇を拔出し平九郎が背ニッ四ッ怠も絶るごりゑ打擲さ笈をハ從者ゑ脊負せつ。引立ゆくゑ盛景ハ呆れゑ呆ゑく。笈ゑいゑくことゑをくごれハ今まで木像ゑ金のかくく。あくをくくぞ親子ゑ於ゑもゑいく變ゑ飢ゑ臨くゑ於悔しさよ。宝の山ゑ入ゑくゑを空しくく縛らくのこなくび彼金の故とくく。賊なくごとも いとくくごとこゑ何としくくゑくさとどゑくゑくどせんとぐゑく夢路とゑるる

公持ぜりこの時日もやゝ暮なんとして雨さへ降ふ亀鞠は父よりも
遥ふ走り過て矢刈の橋の上ふく待あはせるふ。ちゞしあれども耳るこゝろなれば
こゝ怪しく。又舊の路へ立かへり目今父が縛らるゝを見て大ふ驚きけれども
救へとゝく走りよりゝ〳〵せしが佶と心つけてこゝは故おるべしとその縁故
をけつこそと尋思しつ並松の蔭ふ躊居ゝ首尾を立ゆつゝ驚
き愁ひ薩陀山あくのゝを告るとも。その賊ハ誰が兒なんべきほ文覺と
せゝふ新べし。父もこれをゝふ故ふ明白ふハ告ずあるゝんかれば彼武士
主従と謀計して父を救ひ出さんとゝく。既よこゝを定め直ふ間道より走て
めけゝ亂時おが耳べき。道の次ふ只ゝとり陣耳ゝ雨よしとゝ濡ぬ
潸然と泣居ゝり。伊庭十郎亂時ハ仁科平九郎盛景が鎌倉を追放
せゝれしゝころハなほ総角ふくありしゝ曾認らざゝ只顧忍の恩太りと

おゝひ悔ゝく東の街へ引ゝとゆゝ。一里塚のけゝりふいと艶麗なる少女の
面ハ濡ゝめれゝく涙の雨ゝ降まゝり。よゝと泣ゝ立在るゝ怪ゝく
ゝゝゝゝゝゝゝゝ立ゝりゝゝゝその故を問ふ亀鞠答ゝゝゝゝゝゝゝゝ鎌倉米
町ある商人何がしゞ女児ふゝ人内経紀ふ拐掣されゝりゝゝこの処ゝく
伴ゝ付りぬ殿ハ正しく鎌倉武士とえゝさせるふ家路ふ送りゝりゝゝ
再生の鴻恩忘ゝ付じ。あゝれ救ゝせるへしといひもあへず又潸然と泣ふ
ゝり。亂時黙頭ゝく汝と拐掣されいゝるゝのゝ者奴あゝあゝぬゝとく。
盛景を指示せゝば亀鞠えゝく宜ふごゝく彼ゝのしゝてハゝゝも殿ハ生
拘せるゝゝゝ嬉しゝさよといふこの時平九郎盛景ハ女児ゝゝれを救へかと
ゝのゝその事ゝ公りゝなゝれゝいまゝゝ言語をかけゝるふ却ゝく父と賊なりと
告ゝをゝゝふゝく恨ゝ憤ゝといくゝ。又明白ふ親子がうくといざ話を

ゑへ別ふ謀やあるべきこゝろふ同ふ為ふ答へ侍ふ何事をもいはず亂時を
亀鞠ふ尋ねを尋ねを義時の仰ふ因て日来惣太を索めぐり只今捕
捕へ頸末を説せ汝こゝろ安くおりゐれ鎌倉へ搦へ行べし
こゝへ亀鞠ものもゝ〳〵よろこびおりゐ後方ふつゝがゆくゆくいく
べくあるべき影の江といふ処ふ到ふ日ハ暮雨も頻ふ降て行ふ今宵ハ
ふ明ん〳〵亂時長人を領て村長が家ふ歇りぬさて従者ハ一室ふ
厳〳〵圍繞て平九郎を守つ外面へ出て朽食などとるふ
亀鞠を憐て〳〵ふ栄折焼て〳〵れ衣を乾させ吾倆ハ年来鎌倉
ふありながら栄町ふかゝれ美女のあるべきもあるべしゝの惣太を捕へ
ざれ出家を忽地川竹の瀬ふや沈まん寔ふ危さるなりしといへ亀鞠
ものゝ宜ハ〳〵不意殿〳〵の庇ふよりて急て故郷へ帰て行る歟〳〵

らハふハどもゝ寒〳〵ゝ鎌倉まぐハたるべの路ふ迷ふ不憐愍を願ふ
のべ折ふ〳〵雨夜の徒然なれふ〳〵ぐりの盃をも勧て慰めはゆ〳〵て
ゆくうハゝ〳〵ふ貯禄なりぬ〳〵それもまぐる〳〵疲労ふて肩癖を打せ
ゐへ何ふまれてゆ身ふあるべた行のゝゐハ推辞仕じと應つ〳〵めく荒余
とゝら咲ハ老ゝも弱ゝも魂不覚ふ天外ふ飛ぐ此ふ少女の爲なゝば
命をも惜まじと思ハゞもあるべけて〳〵そゞなうに一人の男膝をそゝめてこゞ
主従鎌倉を出〳〵日より彼惣太を捕へんとゝ居多の囲〳〵を縦横ふ徧歴
〳〵朝ふハ星を戴〳〵ゝら出夕ふハ月ふ送られて宿て一日片時も安きこゝひ
をなさぬ〳〵ふ既ふその賊を搦ゝられバ些の欲を尽てもよう〳〵ん〳〵や
一椀の村酒ありとも此の少女ふ酌をとゝ〳〵せ〳〵須日の疲労を忘れんハハ
ふとゝふ老〳〵れハ頭を掉〳〵いみ彼惣太ハ孚常の癖者ふあるべ

通宵よく守りて。殿の仰せらるるの旨。伺の暇あり。酒盛り捨ぶるき
とく業にぞ。彼男うるはしく。常言ふ。死せる虎ハ生鼠ふ及ざるといふを
ゆゑ。彼賊いふ猛くとも。厳く縛られば檻の獣ふ比し。酒を飲じ
といふ人ハ。こゝにおいせよ。又飲んとそふるハ二人ばかりまれとそふ
求まく。いまて酒を買りまるべくとゝ。鷹ゝ二三人養ひ立
身づくうひ。松ありてちこ走り出ーが。いまなく二樽の酒ふ。殺
よたれとり添ゝ帰まりまぬ。さて件の酒殺を安排おのゝ囲坐
ちゝ盃を右ふめぐし左ふ巡し。潛きあひ飲ものよ。亀鞠ハかゝれ席ふ。
物騒ゝる白拍子のゆなれば。彼ふ強とれよ勸めーばぞ。賢ぶりる
ける老者も思ふ様ゝ。諸人を掻もけ出ち受ゝ飲ふれば。夜のいとゝ深る
をちゝぞ。あのゝ泥のごとゝ醉ゝ。竪ふ臥ー横ふ輾び。果ハ鼾の声のこゝ高。

亀鞠これをえゝ。今ハ公易ーゝ嬉ーゝ潛ふ父がほゝりよ歩こ音ゝ懷ある
短刀を抜出ー。縛の索ふと切解ゝ。ちこし密語折ーもあれ一人酒ふ嗜
ぶれ。ものあ目睡ゝぶありしぶ。この景迹をゝ大よ驚ゝ。声とふり立ゝ
衆人をよびそえをを。平九郎ハ二声ゝも叫ばせぬ走かりつ枕方ある刀を
奪ゝ丁と切ゝ。磯と倒ゝ死ゝ。衆人もこの肝潰ふ。呆てぞハ
いふと驚ゝぶ。酒の醉いまぶ醒ぬ。起んとしゝハ輾転ゝ。平九郎ゝ得
たりとゝ刀ふ打揮ゝ。向脛肘のこゝひゝ。當れふ幸ゝ。一人を残ぶ切
ゝ伏ゝ。鮮血あるを出ふ傷口より。酒の香ゝ。屍ゝ。秋の巷ゝ
踏ちゝ。酔れ横ふ彷徨ゝ。伊庭十郎亂時ゝ。ずとゝ同ふ離ゝ。
ふゝ燈ふ對ひ。鎌倉へ上へあぐれ。驛使の書ふ王ふ書写ゝ。ありふ折ふ
胖響遥ふ聞ゝ。筆ふ代ぶめゝ耳ゝ側つゝふ。ちゝ人の足音ゝ

亀鞠ハ伊庭が従者と
しらんし
酒に醉伏
させ父の縛を
解ハ
平九郎
悉くこの徒を切害し
剰伊庭を討く
三千金と棄ん
親子影江の
旅宿を
脱し去る

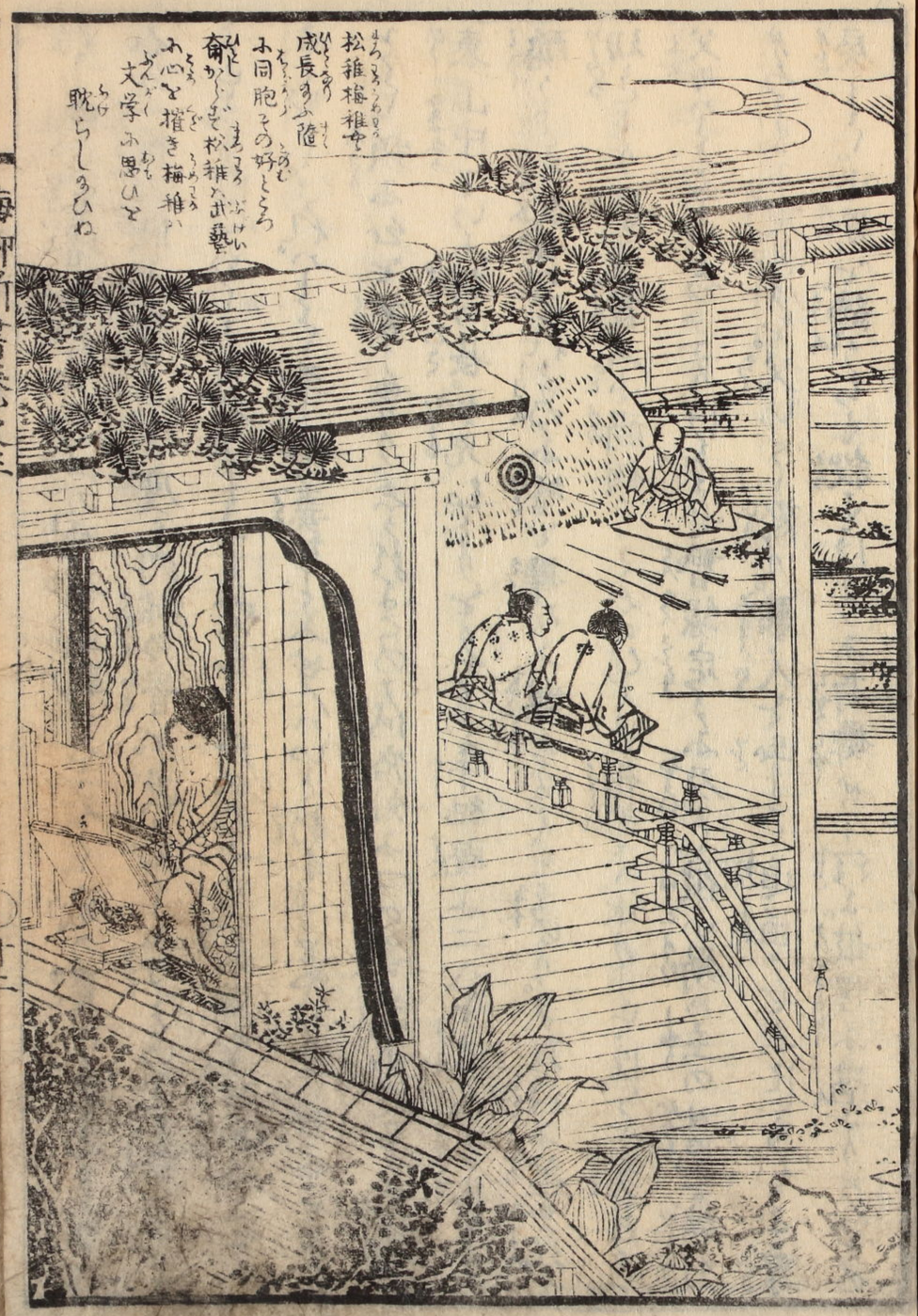
誰そと問へば。矢筈より伴はれ女子なりと答ふ。亂時人々。今外面の頬ふさるがごとく。何ものぞと問ふ。亀鞠その子ふ行り。殿の従者ども酔ひ。れあらぶひを去らぶし。打あひ傷つくものも多かれば。志々せヤさん烏ふ乗りぬと欺べ。亂時大よ焦燥く。彼ホ犯人を守るべく。酒を貪る同士打をいとどとそ越度なれ。いでそれゆゑ強めんと匂勾て。刀引提て小暗き廊下を走り来るを。平九郎ハ枕戸の蔭ふ躲居く。遺すじ下と切る。怯むべし亂時ハ。隅より膳まぐ。乾竹割ふ切仆され。躲まれ両段ふ成りぬ。志ばしもあらで亀鞠ハ彼此とうん探りく。二十両の金をも奪ひ。足を翹鮮血を踏く出来り。貳布を打ふりく父ふ云ふ。盛景莞爾と志く。伊庭が従者の簑笠を取く。亀鞠ふもうち被せ輒くこを脱ぎ去く。径より山越ふ。洛外投く走りする。此夜ハ。通宵雨いく降く。霎時も小止なく。村長が閭宅の男女ハ。ふ庖湯のうふ困れ。ここくこスゆをちくくど。天明く後のわかりハ。書つけんふくくしけるべる略ね。

七　松稚九潛く白川山ふ獵まて

この時華洛北白川ふ。松稚九十七歳。梅稚九十五歳ふ成りまひね。兄弟戈器世ふ勝れく。その名ぞまこ〳〵く。松雅いその人とも武藝を好く。只顧弓馬剣法ふ事とし。梅稚九ハその性文事ふ嗜く。日夜讀書筆硯ふ怠しくぶしまく。父の惟房朝臣ハ。年来子どもの行ひふ心とつけくつくく尋思しまふ。むしろ父義ふ仗く行稚の一命をヤ既て獻山月林寺ふ登しく。祝髪せさせまふ。彼人出家の行とあるを遂ふ逐電ちく今ふその往方と学こはを。朝家の崇ふ家ふ及ぶるハこよりも幸なり。といひ亡父の志忽地徒るものとなりく。冥土黄泉の下ふくも。はこそ

朽ちくおぼえそらふあ。せめくてゞ子ぶもを。一人ハ出家にして。行盛一家の後世ハ
吊せゞやとゝ。まづ斑女前ハ情由を告て宣へ。松稚ハ嫡子わしてゝ
ゞまも勇ゝをゞ。法師とゝるゝ所婦ゝゞし。梅稚ハ幼ゝとゝり閑稚あり。出家
させんふハ。彼その器ふ稱へり。ゝれば今より仲圓阿闍梨ふ進てゝ。せくゝ經
をも讀習さゞゝもおりふも。このゝいふあゝべゝと宣へ。斑女前も丈夫
の言語悉理あゝふ推辭ゞゝ。殊さゝ行雅の往方ゝなりゝゝ歎き題
ふかゝりゝゝ。生家させんと宜へゝ。志の永ゝゝ。不覺落涙ゝるひゝり
ゝゝとゝゝ梅稚ハ。去年の春より叡山月林寺の仲圓阿闍梨ふ弟子仕
行童の如くふゝ在しゝ。元来その容姿の艶ゝゝるゝハ。閑んとする春
の花圓かゝんとする秋の月ふも比ふゞゝ。ようゞ女子ふゝゝえさしゝゝ
風情ゝゝを。無下ふ法師ふすまゝ。せんハいと惜ゝゝなりゝと人みな

ゝあゝれとなん。是ハさてゝおゝ仁科平九郎盛景ハ。影の江の郷ゝて。伊庭十郎
主從を欺ゝと殺し。亀鞠ゝ拵ゝ間道より牽洛よ上り。西の洞院六角のあゝ
ふ。ゆゝしゝる空房あゝと借得ゝゝゝふ居をゝ。その氏ゝ更ゝ。赤石平九郎と
名告わり。豫ゝハ彼三十金をゝゝ。亀鞠ゝ衣裳の料とし。彼ふ白拍子ゝ
させゝ。容易世をゝゝれゝ。おりひとうゝゝふ。洛へ上り宮ゝゝ。
亀鞠ハ風のゝちゝゝ打臥ゝるゝ。次第ふ病劇ゝゝなりゝ。醫師もいく
たりとゝゝのゝゝふ。ゝる瘧病の重ゝなりとゝふ。平九郎ハ命綱ゝも新ゝを
ゝゝる。女只のゝしと危くゝえゆゝふ。安ゝゝ。熊膽。眞珠。人參のゝゝし。
さゝゝ價ふ拘ゝ。そよゝとゝふ極の藥劑を用ゝふ。件の金も忽地ふ遣盡し。
些の衣服調度ゝ。ゝゝ。悉く沽却ゝ。家ハあゝ住居をゝれど。舊の空房ふ
異ゝゝゝ。ゝゝハ神無月の上旬ふ及ゝ。亀鞠ゝ病著ゝ。おこゝり果。平九郎を


松雅梅雅や
成長するに隨
ふ同胞その好ところ
奮かしぞ松雅か武藝
ふ心を推き梅雅か
文学ふ思ひを
耽らしるひね

ちゞめて安堵ぬ。されど山田の晩稲苅乾をうへて歳の豊けきをしりぬるから。今ハ一挽の飯にえしく。千度ヶ門砧の音を寝覚してふりといへども。衣を更るよしもなし。かくてハ思ひしるもみなそふたのめふく。亀鞠を白拍子よみをこそかくて。されバとて平人の妻などにせんハいと朽をし。とやせまじかくやせまじとて。頻に心を苦しめたり。しかるにこの頃洛外に一ツの奇談あり。こゝに白川の東。山中といふ村の長。女児をもとりそてり。年紀既に二八をすぎて。容止も又醜からず。父母ハこれがために婿を撰むに。媒する人もおほかり。されど彼女児を幼きより家に養ふ小廝何がしとしのびくて相語らひ水も洩さぬ契りとなりしを父母ハ更に知らざりける。さて婿縁定まるに及んで。彼小廝ハ主の女児を誘引なんともに走りしを。父いたく怒り。数人を出して追留させ。否ともおさで撃戻して。小廝を縛りしも殺をばかりに打擲せし。彼憤に堪ざりけん。その

夜ふかく舌を嚙断て死けり。女児ハ父母をうらみ小廝を哀み忽地おもひこがれなりて出まどひ出村稍盡なる池に飛入て。遂にうたかたの泡と消ぬ。されバにや朝のをはゆ夕日まで又さらでも夕ぐれには。彼女児が幽魂池の畔に立ぬるありと。いひふらすものもありとて只嚣しく風声せり。平九郎親子ハこの物語を伝きゝて。彼村長が愚の浅さを冷笑ひける。この日小春の天いと暖なりけれバ亀鞠ハ久しく寝乱たる髪を梳らんとて鏡に対ひ。ますゝ顔色の痩衰られをみて数回歎息し。父がまへにいでゝいふやう。男子病しぬれバ家衰へ女子病ぬれバ色衰ふ。今まで久しく病るがゆへに。父いよいよ貧くなりたり。已に急を救ふの智剤を用ざれバ。我の病ハ愈ども貧の病ハ治しがたし。ねがはく顔色の衰ざるをうかゞい。これにつきて謀あり。彼山中村の長が女児入水して夜を夜な池の畔に幽魂の立あらはるゝと風声するこそ幸なれ年来習ひおぼえたる俳優

走り彼此霊に打拂その処にゆきて往来の人を驚さば里人はいかもさぶ
豫ぶ少怕る旅人ホ周章て逃まどふ或は行李と遺し或は懐の物を
落しく走り去るべしその時ぞ父迹ゆつたく拾ひあつめくりてえりめん
ホ。些の得つるるけはあるべくぞこの謀計いふ付くんといへば平九郎大に歓び
寔ホ此男はこぶ子なるべし。女色兼備りる少女なりさぶ去りせんとくく次の日
より親子ともホ山中村の池の畔ホ到て。亀鞠は手孤る擾の虚にありる
裡ホ躯と平九郎は山の蔭についたくく合圖を定め人の耳目を絶えは交まつ
その暗号まホ。亀鞠は白き内衣を被ぎ長なる墨髪をふり乱し。女ぶ虚
より出る。拈尾花の中に立在物実いとくそなるとをえ形容は更にこの
世の人とも思ぼえず。閻王廳前の呵責を脱と為く。秋くしく怨を陽人
ホ訴る陰鬼のごとくそなるべくこと見をえる人魂をしあひ迷まひて

和ふりる物の落るとも走りと平九郎はその後方より長せをを拾ひ
折ホは物あるもなりけりさらねぐホ一犬形を吠て百犬声を吼るホ世の習俗
なれば怪なるのふりく怕るる。申の刻ぬくは彼池の畔をるるりあ。離く
れ乱草人を拒くく。暗蛩霜ホ帝のごとなれば平九郎親子ともめ
ふも似ぐ。むそくく彼処ホ立あるくく本意あ。ある日も夕ぐりかれ折
も松稚丸は従者僅ホ両三人を率く。終日白川山ホ逍遥鳥獵し。日とも暮
なんとすれども山を伐くくとしまふホ。樵夫とおぼしく男松稚をつくくえん
くこの山中の西なる池れ畔ホ近曾怪物の出るとく。申の刻よりとえく
山を伐れのごとし。ぬ後りく暮も山の腰をめぐりくぬ。ぬも早暮くくみちし
おそくくホ巌の家ホ歇くく。詰朝洛くぬりめしといふ松稚点頭くこと
もそのるを少くくホあるぐ。去れども人死るとくは三魂天ホ昇六魄地ホ

ゆりあつ〻人間ふ徜徉さぐさ理ま。なまま〻臨終の悪念ふ成りて。或い幻ふ怨と述或い夢ふ救と徴るこ。ふ〻くようのひ徒ふめ見とまま〻〻抵雑れるさ〻れふく。真の寃鬼ふあ〻ぞ。これ今彼処をる序ふその生い偽を試さ〻〻と宜べ彼男呆ま果いとるく〻えあふさても膳の太ち人ることおわせ。よなたちふこばして。可惜命ちれあふなといひみて。走りこふれば。松稚ハ一人の従者をえ〻〻く。汝ハこれより先ふ歩〻く固様〻〻ふせよ。これその機ふ臨〻く謀あり〻仰ちれば。彼人ハこ〻ろを〻〻く。遥ふ走りぬけり。松稚又ま〻二人の従者をば道次ふ退けこの身い樵夫のこかまふ捷徑より彼池ち〻く求へば入相の鐘遠く響えく。高峯の嵐いと寒ち。平九郎ハこの五七日。〻〻く人ふあらまば。目今松稚の従者ら只ま〻ま〻ふれを〻〻く竊ふ訪ひ。〻〻ふこれを〻ふれば。亀鞠つと生〻薄の中ふ立あふ〻〻ふ。彼従者ハい〻〻怕〻おりら〻〻く。阿呀と叫び逃去り平九郎ハ彼ら物を落さ〻れとい〻本意あ〻ろしん行ともふ〻ど迹ふつ〻く。西の山路を走りね。亀鞠ハか〻〻劫〻〻く舊の処へ躁入ふんとるふ。ちひもうけど虚の中より。狩装束〻たる若人。奮然と〻〻跳出足爪揚〻〻礙と就ま。亀鞠ハ身を轉〻〻く地上ふ倒ま。株ふ膳を打せく。息もえ〻〻あれど苦痛を忍び〻〻逃ま走ふんとるを。若人ま〻て襟上ふ。膝下ま布〻〻動せ。この人ハ是松雅なり。松雅ハ〻とり捷徑〻〻亀鞠ら後方ふ出。彼ら従者を驚ま間ふ入り〻〻く。虚の中ふかくらひ既ふ假幽昊ありと認〻く輙くこれを捕ま〻〻り。その時亀鞠ハ虫の鳴ごうなる声〻〻く。恐〻〻〻〻〻叫びれば松稚ら〻〻〻〻とうち笑ひ。汝甚膳太〻〻。夫暗さ〻〻ふふ神明あり。明るとこ〻ふハ王法あり。か〻怪〻〻打扮〻〻く

亀鶴ハ山中村の
池の端ニ立在く
假幽霊こゝろ
往来の人と切て
物をとゝんとせゝふ
忽地松稚丸ハ
懲さる

人を劫さんとす。物を取らんとその謀計あるべし。今人を追つて麓のうへ走りしハ何のそなたに対ふ文黨あるべきハあらじ。さていかゞ告よとあらく責問ふ人ハ。亀鞠偽り悲びくるゆゑ。ハ行られバ迷ふ言葉色しつゝいそ滋賀の山里ふ住居せるものゝ。家ハ究く貧ふ。祖母と母と二年以来長ク病ふ打ふしこれバ父なるものも活業をあつかく。又良薬ありといへども貯禄なくれバ用ゐ変うまゝ。父ハ祖母の為ふ愁ひ。こゝ身ハ母の為ふ悲び。こハ道ふ孝ぶ志ありながら。近曾此処ふ怪あり。といふて。親子共なく。あのびるゝ。慢ふ人を驚し。携へられのゆゑ落とるなどあれバ。拾ひとりて薬の代とし。祖母と母を養ひ行り。因今麓へ帰りしハ父ふて。外ふ相語る人ハ。しハ寔ふ一旦の出来ふ行り。かくてふれ行るゝ。いまこの身の過を悔ね。おのれ命ハ助るべくゝ誠しやゝ。松雄丸つくゝ涙ふ。汝ふ

おのれ人を劫し掠ふ志ある賊なり。縦親の為ありとも。盗しゝ孝なんや。揚ふ父を救ん〻虎と戦ハ。猛虎靡然とし〻争ひ。蔡順母の為ふ悲を告れバ。赤眉の賊もこれを殺さず。故ふ至孝ハ天地を感動す。汝ふなぞ〻ふ。承と負〻その臭たを説を厭ひ。泥を投〻その汚をとゝ諱のごとく。親を賣〻賊をなす人ふ賊なりといふ人を憎む。その罪尋常の盗人ふ勝れり。今ことおりひもべ〻れとい〻ひ懲し〻起し。ちゞやく〻その面をえのハふ世ふ比べ〻ふ人ふ驚く。人の心ざまどう。貌の醜美ふもゝ〻ふ〻れるものゝこの女子。り富貴の家ふ麗遇を得く。發跡こわんふ。忽地ふ家をも乱し。国をも亡し〻。鞍の人の殃と釀さべし。今これを殺さ〻浅の愁ひなゝ〻ちゝんふハと尋思し。刀の鞘ふまとゝけのひ〻ぶいゝ〻れ廷尉ふあゝ〻ざれバ。私ふ人を誅まべた理ふ。只い〻〻懲し〻久後を誡ぐやく

ゐひ〳〵。腰なれ列卒索とり生く。亀鞠を模の縣へ縛着墨斗ふ筆を添く。まづ彼が額ふ鬼といふ一字と書写し又左右の腕をまくりあげて。

鬼鬼ふあふぶど。孝孝ふあふぶり。心り〳〵真の鬼とゐふ臭も隨く頭なれた鬼とゐふん。

と書くぶめく。再び亀鞠ふ對ひ。これハ吉田少将惟房の嫡子松稚丸し。りふ潛かうよ遊山〳〵のかくさるれが汝を殺ふん。汝ぶら懺悔してかくるく〳〵れ悪念を起そゐなれと說示し。遥ふ東の方を招たまへ。二人の家隷ハ少し行とおもく。道次ふ立車〳〵れが忽地西の山路より走り来ぶの件のるゐどえもしゆり〳〵音と揮ひ。且松稚丸の智勇を稱賛ふ〳〵まり。さろ〳〵ふ松稚主従を麓を手〳〵ひりまふはじめ僞て走りる従者を。途ふ寄あへ〳〵緣由とゆ。且驚と且感ぶ。とりみるひろふりて。家路へいそぐしほいふせられ。ぶても平九郎盛景ハ鬱ふ逃走る人の迹ふけるて遠く麓へ下臣ふ。終ふえらしるひ〳〵徒ふ立人ハ。そひもりけど亀鞠を額ふ鬼といふ字を書ぶいさく〳〵擾ふ縛つけられ〳〵あり。ぶ驚て鞦掌てゐの索を解去。さまく〳〵勦て〳〵故を問ふ。亀鞠ハ松稚ふ嚴〳〵懲られる緣故を審ふ物ぐり。左右の腕を褰〳〵せられバ。平九郎盛を切て。これ今〳〵へ立かくる途ふく。一人の従者ふ。滋藤のうゐ獵矢とりそえ〳〵ひし又一人の後者ぶ奏ゐ鷹を居さし〳〵東へ〳〵れ若人ハ彼松稚ぶん。彼ぶ父惟房ふ。昔総角のころ義と締く。兄第の因さ人ありゐるゐが才。行盛の子と〳〵。弓矢の家ふ生れぶ。法師となり果んゐの朽をさふ。敵山を逐電し。かく命運微く〳〵。霧〳〵世を孫ふ。彼ハ官職と〳〵ふ昇進こく。いと時めくも猶し。剩これぶ小児の爲ふ。ひぶ愛子ハ喪

ゑんとし。飽まで恥ゑせられぞ恨なる。されり立くるるの今沙早うせハ彼小冠者を立地ふ打殺しくもてんりのを。ふ〜〜途ふゆさあひなぐらちゑで過める悔しさよとく〜。躍おどりく。ちゑし罵りく已ぞれば亀鞠ハいよ〜憤ふ堪ざど。一声叫く仆とくゑば。平九郎周章て〜さまぐふ勦てふ。ゆうて甦生られど。蹴仆されし時打られ腮ふくゑび痛出く。立居も自在ならぬ。かくハ出のより家路ふかくゑんこと覚つなしこく。父が肩ふ引うけつ。その夜の明ぐるふ。辛しく西の洞院へ立入りね。ちうてしより亀鞠ハ頻ふ心痛ちそふくゑび長ちき病著ふうち卧しりこハみる積惡の報ありとハいひもかけど親子ハ只顧ふ世を憤り人を恨ゑく。非を改るのゑ法なし。ゆゑく亀鞠ちそ松雄ふいく〜警られゑれ憤りのたゑ〜忘〜際もあ〜孫ハちゆ〜歎息しゆ。ゆ月十二分の顔色ハありなぐふ。夜光を泥中ふ捨〜終ふ玉人ちあぐぞ。

り命ありく時と威勢を弱くゑんふ。惟房一家を滅〜〜この恨と散ぞやハふくべきと云とりごち。悪念さゑふ除増ね。抑女子の美ふして邪智ふゑハちの毒砒霜より甚し。人ちの毒ふ觸ちくゑハ。終ふ死亡を脱ぎて。宜ある人ちなる兼久の播乱ハ。ちの亀鞠が三すの舌より起ゑく。あさまし中院阿闍梨新院順徳ちる遠ち嶮峯ふ遷されまひね。只憎ハ中ちゑゑ。中院ハ古今一種の毒婦ぞり。

忍憐太酔く西洞院と闘ぞ

忍憐太ハちゑの頃薩陀山ふく危きを脱ぎ。愿哲とのもふ伊豆の山家を徘徊く。長月のはじめふ。武蔵へ立越んく。相模路ふ出道をぐふ巷の風冬ぞ仆く。年末鎌倉より追捕せちゑふ。忍憐太ちふ光賊いね。月某日。三河國矢矧ふく伊庭十郎胤時ふ生拘ぎてりしふ。その夜景江の旅

宿ふ於ふ。亂時主従を欺て殺し。忽地逃亡く往方をれど。よりく鎌倉より
國ふ公文状をくだされ。厳重ありといひ罵るもの。惣太仰く
ぬく怪こそれはさるおばえなれよ。かく流言しく油断なを不意ふ搦捕ん
とそれの謀計をふん。あれば鎌倉ふ往来ね武蔵ふ到ふんはその孫
ふ係ふさいあふねうといへば。原哲もげあと諾く。二人の従もよ途より
取くく。ふくび西を投く走く半数日ふ及び。伊賀伊勢の間ふ且く
躲居く。その年の霜月ふ。大和路ふ出く落ふ上り。あれ日の夕られよ。
原哲をわく。西洞院なる酒店ふ到ふく。半酔の酔を盡しつと走り出と。
主人慮しく引とめく。こは酒の費を忘くや行ふいと慢ありと咲けば。
惣太點頭く。ふい持ありくれ銭なし。かくもく出んとまるを主人引とあるる袖ふ放ふべ。ゆ者が声音と笑くふ。関東の

人とおぼし。洛ハ定めく旅なれべし。いろ所ふ宿りく年とる。名告くゆ人
人ふつけく奉とるくりやといひもをらぶざれふ。惣太声とふり立く。そ
も怪有なる奴ふなかどりれ銭を債らんとく。旅宿を回くやあるそ。その民
ふへべよべ。やうありといたまきけく。忽地拳を握かくあく。片頬も側ふ
礫と打たふし踏あどくく動せて。酒保小剛なんどの形勢をこく且驚
且怒り。主人を救んくく立さへば原哲奮然とし押隔小剛なるて
杓を奪ひとりく。置あへべくれ酒の鍋を悉く打碎ハ数十斗の酒かるれ
くくりく門ふ泉を湛くり。惣太ハその間ふ乗ふ勅誇て。端近なる火桶ふ
取く投出とふ。その火障子ふ飛ちるあそ。衆皆いく驚ふまどひ。打消ん
とて走まる間ふそ。原哲ふ注目しく。いちく出去りむし抱朴子
ふくることあり。百尋の室も分すの鼎より焚千丈の坡も一蟻の穴より

環堤の海
西洞院

潰るゝべきなる老幼最心を用ゐ慎おそれこの災なり。太お
ら悪魔さゝゐ北人ゐ物ゐ。さる祝融俄頃ゐあれく。一院後鳥羽の御所は
迅殿と雖も受記それふ。又百姓
まえ久元年
月八日上皇
御所五辻
移徒御
ゐ品辻五辻
も今その地
あるべ
も行遠ゐぬゐ事急なれば車〜そはゐれまでもゐく吉田少将惟房院
を負たてまつり。殿上人少〜供奉〜。高倉を東へ御幸ゐ〜まゐらせれ。
まいてや皇妃以下の女官〜らへ。おりひ〜ゐ出すゐ。ゐ〜れ折も平九郎盛景
と。女児亀鞠ゐ。久〜病〜起卧も自在なら〜ぬ。近隣ゐ祝融の愁ひ
あり〜。いふゐもせんなくべきなれば。ゆり〜れ葛籠へ亀鞠を入れく楚〜脊
負ひ。東の巷を投く遥ゐ脱れ去。ゐ冨小路まく来よれば。ゐ〜く葛籠
ゐ扛おろし。一息せん〜く汗押拭〜れを。愿哲へ物ありとえく。途よりつけ
ゐ〜り。つと走りかゝる葛籠ゐるゐ扛かれば。平九郎大ゐ怒り〜。襟上
掴み〜引戻し。こゝ不敵なる盗賊なゐ人も人ゐよるりのを。可惜命うしなひ

そこ罵り〜。刀ゐ閃〜つ切人とられば。愿哲へ石をうち〜〜投
げるゐ。平九郎物もせど。透間もなく切〜ゐれば。なかゝやおりひろん足ゐ倍
せく逃走るを。いづ地までとゐ追蒐こう。忍の憑太ゐ小〜後れ〜この處を過
れ〜。路のほとりゐ重ゐなる葛籠のあゐ扛こゝ。密ゐ訪ひ。押ゐ開〜く
負ひしゆうとゝれ折〜もあれ。忽然後方ゐ足音〜。人影出れゐ序ゐ
かりけゝ驚き聯絡ゐ葛籠扛捨おゝく走りこゝねゝても少将惟房を。
後鳥羽院扛負ひ。ひらひらこの街すぐまりしゐ。失火も輙くうち
滅ゐ〜〜。ちゝ〜ゐ公卿ハいまぐ追著〜てまつるゐ。あまりにかろ〜〜ゐく
こえ〜せるゐハ。御迎の御車扛待あり〜て。還幸なしまゐ〜せやゝて霧時路傍
ゐ立在く。情由をゆえあびまゐふ。院もいと〜走ふしく。頻ふの苦しく如ば
せ〜べゆづゝゐふく想んゐ。いづゝこゝ。すりもおろ〜居のへと仰るゝれど一枚の

平九郎盛景ハ
亀鶴と葛籠へ
扶入て火難を避く
冨小路
折しも
愿哲葛籠を
奪へしあふそ
思ひ太ハ少し
後れくこの処を
さりける

蓆ござふかくて地を踏せたまはんハいともかしこし。いかにせんと思ひわづらひ給ふと
それハ何ものゝ遺けん。むかう近う一ッの葛籠ありけり。このうへなく居たまふ御座には
よく。おのく朝服の袖を離断して葛籠の上にかけ。其座を設けし假の褥
らうまかせて其処へおろし参らすれバ怪むべし。人ありとおぼしくて。葛籠の裡より
頻に叫ぶ声せり。院ハやすくもはらく給ふ。惟房以下の徒大に不審みて連忙く抱き
あげなんとすれとき。忽地御車きらめく音ちかく聞えて月卿雲客
夥く御跡を慕ひまゐらせ。やゝ程もなく参りあひければ。惟房朝臣そのよしを御車へ
うつし奏せられ。後鳥羽院ハ目今葛籠の裡なる女子の声せしハいと怪
しくおぼせしかバ。彼何ものにかあらん。ともかく裡を見よと宣へるほどに六位の
官人らけしめりて。件の人を扶出せバ年紀二八ばかりなる女子なりしがいと窶れ
たれども。その嬋妍なる容止ハ雲の上にも又比なき美人也。正に是富小路

の名に負し。亀鞠が蹤跡しれざりし時節到来やいかなりけん。一院御車の裡
よりこれを見そなはして。何となく愛させ給ひ。惟房朝臣を近く召て彼女ハ
何ものなりや。その素生を問べしと仰されバ。惟房おそるくく亀鞠に對
ひ。汝ハ何の人の女児にて。何の故ありてこゝに捨られたる。縁故を審に
申すべしと宣ふに。亀鞠ハ事の形容をつゝしみて。これハ尋常の御車ならず
ぞ。主上に伸しまさバ院などもふかく嬉しめと思ひて。恭しく眼を斜にして
媚を献じ。手を地上におきて申すやう。みづからハもと白拍子にて亀鞠と呼れ侍り。
父ハ武士の浪人にて。原ハ信濃國の住人仁科二郎平盛遠が族に赤石平五郎
盛景と申すものなりしが。久しく心痛の病によりて。起臥も自在ならざりしに。
今宵近隣に失火ありしかバ。父盛景をバ葛籠に扶入まゐらせ。みづから脊負
て走り出たる途中。盗賊に出あひぬとおぼしかりけれバ。そのまゝ逃行や

しかれども此所ハえ侍らず。そのおのれに只今人ありて。葛籠の上に尻をかけすわると見えしが忽地うち消しきへなりて。病頓に愈りぬと申す。惟房奏して。寔に至尊の玉體に命も惜まれず。彼が病の立地におこりしといふも故あることと感激しく。縁由を申しあげたてまつるに一院仰られ申す。彼が父を前年死刑をおこなひたる。仁科盛遠が娘なりと申せバ。零落せりといふとも平人ならぬものぞ。朕彼女子をつれて捨おかれるもあはれあり。汝彼を養ひて姪とし此所にまゐらせよ。このころは委人その惟房が許にありしもおぼえず。朕がこころを得ずして許さるべき。されど窓中に仰しかバ。惟房朝臣眉を顰めて。只浅まし。十善の君として賤き白拍子なんどに玉體を汙されまうるべしと。只顧思食かへさせまうるこそ願ひしけれ。その言語を竭して諫まゐらすれバ。院は氣色あしくつかへさせたまひて惟房にまうすやぞ。むかし白河院ハ賤の女子を

召れて鍾愛比なく。祇園女御是なり。今の女子とてなどか勝らざるべき。ふかく卑しと嫌ふべきにあらず。且汝養ひて進らせんにおいては世に怪しまるべき。再び諫るは宜からず。惟房に青侍二人を従へて。よりて身の暇をまかりいでて還幸なしたまふ。惟房朝臣ハ御所をまかりても。なほ諫めまうせらるべくもなく。惹く牛車を同送つ。そのまま御所にて一院ハ日来大臣の諫をも聴たまはず。いかでか心の随に挙動たまふのみぞ。惟房などがかしこくもれども諾すべくもあらず。院宜まゐらせ後ふさぐべきもあらんと深念して。青侍一人をはしらせ。今ハもあれ此の女子を尋ける人あるべし。潜に惟房が第へ案内せよと云しかバ。ゆゑおぼつかなく今一人の青侍にハ亀鞠を扶掖せ。北白川へ帰るまで途にて惟房の家隷とも主の迎にまゐりたるなりと行あひまひし。途に忽地従者夥しくなりぬる。

後鳥羽院お思召し
病臥
御所へ

（九）金鶏山を告て惟房を陥る

かくて吉田少将惟房朝臣は亀鞠を将て家に立入り。班女前に院宣の趣を告て。彼女子をよびに勧まんと仰ければ。班女前やがて春雨を召て亀鞠に浴し沐せ。新衣一襲をとり出てふるきを脱かえさせるに宜けり玉を欺く美人なて。霞被軽く装ては趙后新粧に倚。金歩静に運びて潘妃旧怨を舒るかと怪しまれ。正に是春風一朶の野花手折なりて餘香濃なりといへども外面如菩薩。内心夜叉。浮屠家の憎も宜なるかな。浩処に富小路に掠りそめし青侍。平九郎盛景を誘引てありしかば。惟房喚び入て対面ありしに。夥の年を経て。面影こそ少し変たれ疑ふべくもあらね行雅なれば。心の中驚き怪しむのみにて言語もなく出し。去るもの名字を問ふに。平九郎は通路青侍が

物語にて。一院亀鞠を召させなし給ひしが。如くは縁を問ひ聊も憚る色なく。伴ひて此に来りし程に。彼もまた主人の心を猜して。行雅ありしは名告ざりき。それがしは仁科盛遠が族に。赤石平九郎盛景と申ものなり。年来関東にありしかども。頼みたる主もなければ。近曽洛に登りて。西洞院六角の辺にしばし住居せり。去ぬる年今出の舞馬の難ありて。女児亀鞠を葛籠に入て脱出て富小路よりて走れる折しも盗賊に出あひ。ことを追留んとして其処にありなかせぞ。既に聞上皇後鳥羽院亀鞠を見て召して。忽地叡慮に称ひ。彼を御所に召さるとか。これ盲亀の浮木にあふよりも稀なる僥倖なり。偏に羽林相公（羽林は左右近衛の唐名）の吹挙を仰ぐるに。とぞ舞楽に舒て。とまり。惟房朝臣はいやく盛景に院宣の趣を告られて。ふたたび驚き。愁に置しては如何かりなんとおぼしく。そなたち亀鞠を養ひ。叔姪の義をとりて

御所へ進ずるに院宣に兼りたれば首尾を密かに説なせ。ずば休足あるべしとて。家隷栗津六郎。松井源五を仰せ別室に誘りて。厚く饗應ひらる。彼六郎源五いとゝ行稚を認りたるのみならず事の爲体を怪しいふに忘れとゝる。欲ばかりもあらねば行稚丸あくまで密語すべ惟房朝臣點頭くこれもけだしその人にあれ。彼を行稚と呼ふ亡父の志を破ず。いかゞれば君を欺くに似たり。むし先考彼と義を締しく。惟房が身とぼせのひしふ。彼人不良の志を抱こと。離別遥に年代経ぬ。今又おほけなくも院宣ふよりく。彼が女児を姪とすべる。宣ふ因縁なくんば行稚志を改めくぬるべし出家いとふ旧悪を償ふべく。實に一家の幸なり。ゆのちふ乃ぶまぐいての人ふちくんぞ。これも又彼親子が素生に。班女ふも告ずとぞ宣ひらる。されば次日

四辻殿後鳥羽院の御所より。亀鞠を召るゝ者あれば。惟房朝臣已にと得ぞ。こゞらこれを伴ひく。院の御所ふ参りふ。その装ひ美と面しく。人の耳目を驚せり。一院後鳥羽ふ対ひおぼしく惟房ふ夕告と名げ給る。御剣一振を賜ふね。この宝剣長ひ九寸五分ふく。鞘ふ金の鶏に付ける。その剣を佩くに人あらく害心を挟めば。鞘の雞忽地声に發そ。又その主殺罰の氣をあらはせば。又鞘の鶏声を發さとく。これ夕告の名あり。かく奇異なる宝剣なれば後鳥羽院ふ秘蔵しく。今度の恩賞とし。惟房朝臣ふ賜りぬとぞ。抑この君ハ文武ふ渉猟ましく。御譲位の後も。土御門院順徳院天子二代の間天下の政ハ。ふ一院より制度ましく。愛くはゝ愛ふ。天魔の所爲ぬやあり。白拍子亀鞠に御寵愛ぬく。後宮の物議もこれが爲ふ顔色なくごとく。加之亀鞠

父平九郎盛景と。五位の檢非違使ふみされし程ふ。彼親子飽まで君寵ふ
誇て。その威勢肩を差るゆなし。それ併一院のはもとひふよりといへども。
盛景ハ朝敵の子孫とて。還俗亡命の沙門なり。今ちがひなく富貴ハ得
なれるゆへ。とくく惟房の庇ふよれハ忽地先非を悔て。彼人の爲ふハ。誠心を
竭さんとぞ。ふさんなりしていめるとなん。亀鞠が。松稚丸ふ恥しめ懲されしを合
て。親子竊ふ志を合し。惟房一家を滅しぬ。その所領を押奪んと謀りぬ。
是ふ親ハ人よりも。ふハ獣ふも劣るといへべし。こゝに又松井源五純則ハ當初
群柏を欺き殺せしゆへ。惟房も彼ハこのゆへ。はしとおぼしく。その一ちを
ゆえく用ゆるべ。あるべきもなしとて。源五ハ嘆く恨こと。密ふ野ふ
と挾こなるべ。相語ふ人もなりしとぞ。数手黙止しく色ふも出さるゆふ。
亀鞠の父平九郎判官盛景ハ。行盛の遺腹子。行稚丸なれこそ。又

彼親子が院の御おぼえ他ふ異ふしく。よりて諸人おのが隨ふ従ふ。
ゆり彼家ふ交加ふ阿諛ひ。ゆのゆゆ。ふ命よかげくうけ
ゆりゆゆ。とくいと真實ゆうゆゆふ盛景も心ふそのあれバこハよりて
方人ありと思ひく。厚く歎待しいろも閑談夜とあく立ゆりて。人さゆ
ちふざりゆる。今茲ハ既ふ暮くあらむの春立ゆり。四辻殿ふハ院の拜礼朝覲の
行幸ゆとゆりめでたくゆり行せゆふも。亀鞠ハその形勢后妃ふも劣らね
ど。愚なれハ美こ賢なハ歎さゆね。惟房朝臣いと法ほしく思て。たゞ諫を
日ごゆ。一院ゆえく用ゆふで。亀鞠又この序をゆく。彼人をあゝさゆにゆゆを
ふゆりく。いよく疎果ゆひく。君寵忽地ふ衰ゆり。惟房朝臣ハ。諫言容ゆ
ざりをりく。こゝ法欝くとなのゆゆ。ある日御所より退りく。只顧ふ嘆息し。
ゆゆとゆゆ亡父の志ふ悖て。且君命ふ違ゆ紙おそれく。亀鞠と進ゆせ

られば。一生涯の過あり。縦今ふ至りて彼親子が素生をもあらとも。一院既に亀鞠が舌頭ふ惑されておはしませば。實言ふ召べくして。嗚呼悲しかな。世の中これより乱るゝあらん。惟房が罪あり。所詮亀鞠が命を断て。天下の禍を除け。これ又自害せんかと。既ふ公を定めその夜人定て。心中の機密なる後の事を人審ふんと。詰朝松稚丸ふ宣ひければ。これ又暇ふ公務ふ暇なく。久方月林寺の阿闍梨を訪ど。又梅稚が安否を尋ねば。月林ふ殿山ふ登りて。この一封を阿闍梨ふ進ぜよと仰されば。松稚丸て涙を流て。父れ書簡を受とり。従者をゞいと寂〻。やゞて比殿ふ赴さまふ。惟房今ハ公易〻出ぬ。おぼ〻。恩賜の宝剣夕占て懐ふかくしまち。衣冠厳ふ装ふ出ぬ。松井源五太刀を持て後方ふ従ひ。廊下をとる折〻も。怪しいなる主君の袖の中ふて。鶏一声鳴ふり。かくて惟房参内ふ後。源五つくゞ思ふ。彼夕告の宝剣ハそのまゝ殺氣あるとハ。鞠の金鶏声を聞もれと。彼人軍たるふ今主の懐ふて鶏の鳴ることを不審ゝ。察するとハ亀鞠殿父子の威勢ハ妬猜潜ふ刺殺さんとく。かの剣を懐ふ来れりの欲ふ。さみくとも兵刃ハかくしのらく院系せば弑逆の罪いうでゝ脱れ。生平ふ為ん参内ふく。後ふ院の御所へ来れば。まゞこのを聞せられ以前ふ。やく彼人ふ来とるこ〻とく。遽しく縁由を書字め。公ふ申たれ下郎ふ〻しく。赤石平九郎判官盛景が第へ遣とふ。盛景ハ四辻殿へ参る途ふく。源五が使ふ行ん。馬上ふその書を投てそう。或ハ驚ゞ或ハ欲ぶく。彼使をゞこよりハ〻せ鞭を鳴し足掻ハやく。直ふ一院の御所ふ来り。源吾が密書をとりく。首尾を亀鞠ふ来れば。亀鞠ハ怒を復もゞた時到ねとて涙ふ笑く。やて院の王生ちうふく。潸然と落涙し。誠ハ吉田少将惟房日来亀鞠父子が

吉田少将惟房
君を諫難くて
ことを得ぜ亀鶴と
殺うんともくるふ
事あるべしと
自害しそふ

君寵他ふ超〻れと妬猜こゝろも短刀を懐ふして。妾を殺んと謀めるよ。人ありて告げるね。君の爲ふ捨つべき命ありせば。つゆばかりも惜ふ足てねど愬ふ人の恨ふ因て。君を驚ーなまいんは罪いと妬ーー。只速ふ身の暇をとるまりて。軒漏月と友とせー。舊の住家ふ入こせまくかしとーもあくどよりと泣て轉輾ば一院幽〻驚まして。こは奇怪なり。惟房刀劍をかくしうちて院參せば。同さーて逆心明白し。忽ふ怒の矢こと院ふ怒ばかりと宣ひしーが。神ふ怒の矢こと〻。赤石平九郎判官盛景ふ。謀を仰せられ。專非常よ使りーふ。惟房朝臣ハ機密の漏〻れとありまるねば朝より退りて。四辻の御所ふまり南面ふ孫廂の下ふ立在て。后町のかしを窺ふ時ふ。とて鷄の声ふ〻く。亀鞠ハこれを見て。ふはその氣ふをあらはさぬ為ふ。伺まふたもうちーて。神一面の琵琶を抱て。端ちーー立出て。惟房ハ翠簾をさとかき揚て走り

入て。夕告の劍と拔揮て。跳かゝれば。亀鞠ふ。ふりてれ。琵琶ハ礫と投つ〻ふ物ふ。と切拂ふ。四の緒ふ。一刀ふ。琵琶ハ左右へ散〻。その際ふ。亀鞠ハ眞ふ走り。盛景つと走りて。矢庭ふ。組伏んとれを身を潜め。投退り。時ふ合圖ふ定めん。北面西面の勇士。物の蔭より走り出て。左より組留てれ生擒ふんと。闘ば。惟房朝臣遂ふ志の遂ざるを。嘗然として。長嘆しひし。伯邑考。姐己と罵て。醢の刑ふあり。恨〻ハ君と聖王ふまる。ことあるこゝ。忠心却て。死後ふ逆臣の汗名ふのこけんとかといはもあくと劍と吮ふ衝て。組まれすふ死ーるふ。時ふ兼久二年二月八日。行年四十歳しかゝ。この時一院ハ。事の形勢を図食て。怒らせまるハ。惟房衛府の重職ふあり。御所ふ於て。劍戟をふるふこと。古今未曾有の椿事

悪鹿和漢ふ例まれなし。そゝ〳〵彼が妻子と搦捕〳〵進ぜつかはしを平九郎
判官盛景ふ仰せてるゝあそ盛景時を移さん使の聽の官人駄と捧て北白川
へ馳むかふ〳〵後一院ハ夕告の短刀を奥めく亀鞘ふのりこの鞘の鶏ふハ
えハ声ハ弦ぜ〜をりく。渡ず矛ふ恙なるをもるをもるう。故ふ賜る所ありし宣
これハ亀鞘ハ君恩を拜射〜ひと面目ハ旅〜り
後鳥羽院第一の御子土御門院ハいめる兼元四年ふ位を仏寿皇子守仁
王ふ伝るのひれ順徳院これるう。ようく後鳥羽院を一院と稱まり上御門
院を新院とゆせ〜。

墨田川梅柳竹書巻之三畢